

ふれあい

No.114 H 20 夏号



限られた医療資源の中で

北里大学東病院
精神神経疾患
治療センター長

副院長 宮岡 等

後期高齢者に対する医療が大きな政治的問題となる中、アメリカの医療事情を扱った *Sicco* という映画を見た。限られた資源の中でいったい日本の医療はどう進むのであろうか。

日本ではうつ病に対して1999年に SSRI（選択的セロトニン再取り込み阻害薬）という抗うつ薬が発売され、爆発的に売り上げを伸ばした。抗うつ薬全体の国内での売り上げは1998年には約170億円であったが、2007年には1100億円を越えたい。これには抗うつ薬を処方される人の増加に加えて、SSRI の高い薬価が影響している。当初の予想より売り上げが大幅に伸びた医薬品の薬価を引き下げる市場拡大再算定という規定により、SSRI はAⅡ受容体拮抗型血圧降下剤（ARB）とともに2008年4月1日に約10%の引き下げとなった。

古い抗うつ薬であるトリプタノールの一剤費用は約58円（1週間で407円）であるのに対して、SSRI 薬に含まれるパキシルやジェイソロフトは約434円（同3037円）と、約7.5倍である。かつては「少しでもいい薬だったらいくら高くても使って欲しい」という患者さんの言葉をしばしば耳にしたし、医師には値段に見合う有用性という視点で治療を考える習慣があまりなかった。SSRI に変えた時、患者さんから「値段が高いので元の薬に戻して欲しい」と言われることがあり、これは精神科医が医療費の問題を再考するよい機会となった。

値段のことは考えずにあらゆる治療手段を利用できる時代が来るとは思えない。患者さん、医師、病院、製薬メーカー、保険会社、国、それぞれの目標が食い違う状況で、現場の医療スタッフとして、限られた医療資源の有効な配分や活用のためにできることだけでも進めていきたいと思う。

北里大学東病院